

令和3年度
出雲市文化財調査報告書

大塚遺跡

2022年3月

出雲市教育委員会

令和3年度
出雲市文化財調査報告書

大塚遺跡

2022年3月

出雲市教育委員会

序

本書は 2020（令和2）年度に実施した、集合住宅新築工事にともなう大塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録を収録した報告書です。

大塚遺跡は出雲市大塚町に所在する、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、出雲平野における代表的な遺跡群である四絡遺跡群を構成する遺跡の一つです。今回の調査でも、古墳時代中期から後期頃を中心とした遺構や遺物が多く確認され、当地における人々の活発な活動を伺える資料を得ることができました。

こうした調査成果をまとめた本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高め、歴史学習の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご理解とご協力を賜りました関係者の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

2022（令和3）年3月

出雲市教育委員会

教育長 杉谷 学

例　言

1. 本書は、2020（令和2）年度に出雲市教育委員会が実施した、集合住宅新築工事にともなう大塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、2020（令和2）年7月1日～8月7日の期間において実施した。
3. 発掘調査を実施した地番及び面積は、次のとおりである。
島根県出雲市大塚町1317-3ほか 約250m²
4. 調査は次の体制で実施した。

<2020（令和2）年度> 現地調査、図面・遺物整理

調査主体 出雲市教育委員会
事務局 片寄友子（出雲市市民文化部次長兼文化財課長）
　　　　　大梶智徳（出雲市市民文化部文化財課主査）
　　　　　原 俊二（ 同 課長補佐）
調査指導 稲田陽介（島根県教育庁文化財課管理指導スタッフ企画員）
調査員 石原 聰（出雲市市民文化部文化財課主任）
　　　　　黒田祐介（ 同 主事）
　　　　　下江裕貴（ 同 主事）
調査補助員 加藤章三（ 同 会計年度任用職員）
　　　　　宇畑豪志（ 同 会計年度任用職員）
整理作業員 前島浩子
発掘作業員 伊藤貴敏、江角和樹、勝部 誠、金森光雄、昌子守男、田邊宏行、寄廣和人、
　　　　　渡部喜代人

<2021（令和3）年度> 報告書作成

調査主体 出雲市教育委員会
事務局 片寄友子（出雲市市民文化部次長兼文化財課長）
　　　　　大梶智徳（出雲市市民文化部文化財課主査）
　　　　　原 俊二（ 同 課長補佐）
調査員 石原 聰（ 同 主任）
　　　　　下江裕貴（ 同 主事）
整理作業員 前島浩子

6. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S K—土坑、S D—溝、S P—ピット

7. 本書で示した方位は真北を示す。座標は世界測地系第III系座標に基づき、標高は海拔高を示す。
8. 本書掲載の遺物実測図については、下江及び加藤が作成した。遺物の写真撮影は下江が行った。
10. 本書の執筆は下江が行った。本遺跡の出土遺物や実測図、写真は出雲市文化財課で保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 大塚遺跡と周辺遺跡における過去の調査	3
第2章 調査に至る経緯と経過	6
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構の詳細	10
第3節 遺物の詳細	13
第4章 総括	19
第1節 SK028 の埋納土師器について	19
第2節 まとめ	20

挿図目次

第1図 大塚遺跡と出雲平野周辺の主要な遺跡	2	第9図 遺構実測図2(溝)	12
第2図 四絡地区周辺の主要な遺跡	4	第10図 出土遺物実測図1 (SD007・SD031・SK006・SK010・SK023)	14
第3図 調査位置図	6	第11図 出土遺物実測図2(SK028)	15
第4図 調査区配置図	7	第12図 出土遺物実測図3(SK052・遺構外)	16
第5図 調査区東壁・南壁土層断面図	8	第13図 古城山遺跡と大塚遺跡における埋納土師器 の模式図	20
第6図 遺構配置図	9		
第7図 遺構実測図1(土坑)	10		
第8図 土坑SK028 遺物出土状況	11		

挿表目次

第1表 出土遺物観察表	18
-------------	----

写真図版目次

図版1	1 発掘前の状況(南東から・奥に出雲ドームと北山) 2 遺構面精査の状況(北西から)	1 土坑SK028 遺物出土状況(南東から) 2 土坑SK028 完掘状況(南東から)
図版2	1 完掘状況(南東から) 2 溝SD031 検出状況(北東から) 3 溝SD031 完掘状況(南西から)	図版4 1 出土遺物(SK028) 2 出土遺物(SK006) 3 出土遺物(SK010, SK023) 4 出土遺物(SK052) 5 出土遺物(遺構外)
図版3		

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大塚遺跡は出雲市大塚町に所在し、JR 出雲市駅の北北西約 2.2km、出雲平野のはば中央部に位置する。出雲平野は東側を宍道湖、西側を日本海、南側を中国山地、北側を島根半島に囲まれた東西約 20km、南北約 5 km にわたる沖積平野である。平野は斐伊川と神戸川が運んだ土砂により形成され、現在では斐伊川は宍道湖に、神戸川は日本海に注いでいる。かつての平野西部には、大きな潟湖が広がっており、斐伊川と神戸川の両河川が流れ込んでいた。大塚遺跡は潟湖に注ぎ込む斐伊川の河岸にある、微高地に位置していたと考えられる。

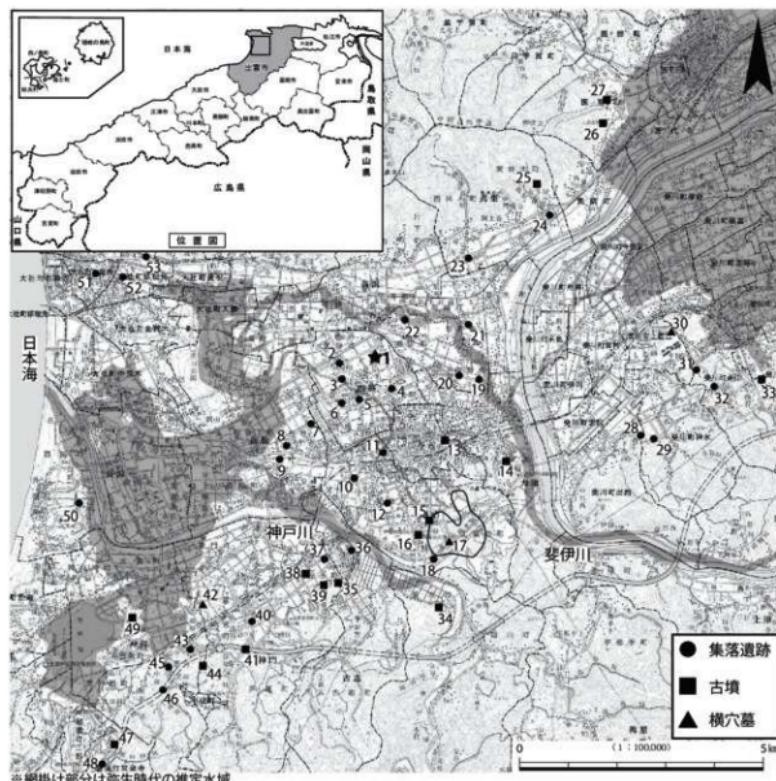
第2節 歴史的環境

今回の大塚遺跡の調査成果については、第3章で詳しく述べるが、古墳時代中期から後期を中心とした、多くの遺構や遺物を確認し、当地における人々の活発な活動の一端が明らかになった。本節では、古墳時代までの出雲平野における人々の活動の様相を、墳墓の築造や集落遺跡の盛衰を通して概観し、大塚遺跡の通史的な位置づけに関して検討する（第1図）。

出雲平野において、人間の活動が確認されているのは縄文時代早期からで、押型文土器が出土した山持遺跡（23）などが知られ、海進により広がった内湾（古宍道湖）沿岸で人々は生活していたとみられる（原田編 2009）。後・晚期になると海退が進み、矢野遺跡（2）や藏小路西遺跡（5）といった平野の中央部にも遺跡が広がるようになる。また、京田遺跡（48）で出土した土器には、北海道産とされる水銀朱が付着しており、当時から遠隔地との交流が盛んであったことを示す（幡中編 2019）。

弥生時代前期では、山持遺跡や矢野遺跡などで縄文時代から継続して集落が形成される。中期以降、出雲平野の各所で急速に集落が発達し、大規模な遺跡群を形成するようになる。青木遺跡（24）を中心とした美談遺跡群、白枝荒神遺跡（7）や白枝本郷遺跡（8）を中心とした白枝遺跡群、天神遺跡（10）を中心とした天神遺跡群、古志本郷遺跡（36）や下古志遺跡（37）を中心とした古志遺跡群、中野清水遺跡（19）や中野美保遺跡（20）を中心とした中野遺跡群などが挙げられる。また、矢野遺跡を中心とした四絆遺跡群でも、大塚遺跡（1）や小山遺跡（3）、姫原西遺跡（4）といった各遺跡が出現し、平野中央部を代表する大集落へと成長する。後期になると、平野南部の西谷墳墓群（14）で大型の四隅突出型墳丘墓が築かれるようになる（渡邊・坂本編 2015）。また、破鏡やガラス玉といった舶載品が出土した白枝荒神遺跡をはじめ（須賀編 2018）、平野の各遺跡でも西日本の各地域や大陸との交流がうかがえる遺物が出土し、広域での活発な交流や出雲平野の勢力拡大を物語る。

古墳時代前期から中期にかけて、四絆遺跡群や古志遺跡群、白枝遺跡群、天神遺跡群といった平野部の各遺跡群では遺物の出土量が急激に減少することから、何らかの理由で衰退したと考えられる。墳墓に関しては、弥生時代後期の西谷墳墓群に続くような大規模な古墳は見当たらない。前期後半に



- ※網掛け部分は弥生時代の推定水域
1. 大塚遺跡
 2. 矢野遺跡
 3. 小山遺跡
 4. 姫原西遺跡
 5. 蔦小路西遺跡
 6. 渡橋沖遺跡
 7. 白枝荒神遺跡
 8. 白枝本郷遺跡
 9. 余小路遺跡
 10. 天神遺跡
 11. 海上遺跡
 12. 神門寺付近遺跡
 13. 今市大念寺古墳
 14. 西谷塙墳群
 15. 上塙冶染山古墳
 16. 上塙治地藏山古墳
 17. 上塙冶横穴墓群
 18. 三田谷I遺跡
 19. 中野清水遺跡
 20. 中野美保遺跡
 21. 萩杵II遺跡
 22. 高岡遺跡
 23. 山持遺跡
 24. 青木遺跡
 25. 大寺1号墳
 26. 上島古墳
 27. 国富中村古墳
 28. 後谷遺跡
 29. 小野遺跡
 30. 平野横穴墓群
 31. 杉沢遺跡
 32. 三井II遺跡
 33. 結古墳群
 34. 刈山古墳群
 35. 放レ山古墳
 36. 古志本郷遺跡
 37. 下古志遺跡
 38. 宝塚古墳
 39. 妙蓮寺山古墳
 40. 浅柄遺跡
 41. 浅柄II古墳
 42. 神門横穴墓群
 43. 九景川遺跡
 44. 北光寺古墳
 45. 中上II遺跡
 46. 麓II遺跡
 47. 常楽寺柿木田1号墳
 48. 京田遺跡
 49. 山地古墳
 50. 上長浜貢塚
 51. 鹿藏山遺跡
 52. 原山遺跡
 53. 萎根遺跡

第1図 大塚遺跡と出雲平野周辺の主要な遺跡

なると、出雲平野における最古の前方後円墳とされる大寺1号墳(25)が北山山麓に築かれる(仁木編 2005)。前期後半から中期前半になると、平野南部の丘陵地帯で浅柄II古墳(41)や山地古墳(49)、常楽寺柿木田1号墳(47)、北光寺古墳(44)といった有力な古墳が多く築かれる。また、中期後半から後期前半にかけて、仏経山から北側に延びる丘陵の先端に、出雲平野では珍しい初期群集墳である結古墳群(33)が築かれる。後期になると、平野南部の三田谷I遺跡(18)や九景川遺跡(43)の

ほか、平野部の各遺跡で再び集落形成が活発になる。集落の隆盛に呼応するように後期後半以降、古墳の築造も盛んになる。神戸川東岸の今市町や塩治町周辺では、出雲最大級の前方後円墳である今市大念寺古墳（13）のほか、上塩治築山古墳（15）や上塩治地蔵山古墳（16）といった、大型の横穴式石室をもつ古墳が築造される（出雲市教育委員会編 1988、坂本編 2018）。これらの古墳は出雲西部の首長層が葬られたと考えられている。神戸川西岸の古志町周辺でも、妙蓮寺山古墳（39）や放レ山古墳（35）、宝塚古墳（38）といった、横穴式石室をもつ有力な古墳が確認されている（山本 1964）。また、後期後半以降、上塩治横穴墓群（17）や平野横穴墓群（30）、神門横穴墓群（42）といった横穴墓も出雲平野周辺で多く築かれている（守岡編 1998、石原編 2021）。

このように、大塚遺跡を含む四絡遺跡群は、縄文時代から継続して集落が営まれており、弥生時代中期から古墳時代にかけては、出雲平野を代表する拠点集落であった。そして、四絡遺跡群における遺跡の盛衰は、出雲平野全体における遺跡の盛衰とおおむね一致しており、出雲平野での人々の動向を如実に反映していることもわかる。以上のことから、四絡遺跡群を構成する大塚遺跡は、出雲平野における人々の活動の様相を解明するうえで、重要な遺跡であるといえる。

第3節 大塚遺跡と周辺遺跡における過去の調査

本節では、大塚遺跡を含む四絡遺跡群で行われた、過去の調査の動向と成果をまとめて、四絡遺跡群と大塚遺跡の調査史上の位置づけを検討する（第2図）。

四絡遺跡群における遺跡調査の端緒となったのは、1948年の山本清氏による大塚遺跡の報告である（山本 1948）。1953年には、旧島根考古学会が矢野遺跡で初めて発掘調査を行い、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての土器が大量に出土した（山本 1957）。

1970年代以降、四絡地区での開発増加に伴い、出雲市や島根県、学術団体により、多くの発掘調査が行われるようになった。特に、四絡遺跡群の中核遺跡とされる矢野遺跡では、これまで9次にわたる調査が行われ、縄文時代後期から古代に至るまで、継続的に集落が形成されたことがわかった。なかでも、新内藤川改修工事に伴い、出雲市教育委員会により行われた第9次調査は、最も大規模な調査となった（坂本編 2010）。調査の結果、弥生時代前期から古墳時代前期までの、未完成品を含む土器や石器、木器が大量に出土し、矢野遺跡が弥生時代の拠点集落である評価を確立したものにした。

矢野遺跡の南側に位置する小山遺跡でも、7回の発掘調査が行われており、弥生時代中期から中世まで集落が営まれたことが判明した。特に、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡や「井」とヘラ書きされた土器が確認されており、官衙関連施設の存在が推測されている（岸編 2005）。

四絡遺跡群の南側に位置する姫原西遺跡や蔵小路西遺跡、渡橋沖遺跡では国道9号出雲バイパス建設に伴い、島根県教育委員会により大規模な発掘調査が行われた。姫原西遺跡では、自然河道内で弥生時代後期から古墳時代初頭の木製品が大量に出土したほか、祭祀を伴う井戸跡が確認されている（足立編 1999）。蔵小路西遺跡でも、弥生時代後期から古墳時代初頭の自然河道や、12～15世紀の有力武士である、朝山惣領家の居館と考えられる中世の館跡も確認された（間野編 1999）。また、渡橋沖遺跡では、蔵小路西遺跡の中世の館跡と同じ時期と考えられる掘立柱建物跡等が確認され、両者の間



第2図 四絡地区周辺の主要な遺跡

連性が推測されている（大庭編 1999）。

以上のように、四絡遺跡群では戦後間もなく多くの調査が行われて、多大な成果が上がっており、出雲平野における遺跡の調査研究に大きく貢献してきた。一方で、大塚遺跡における過去の発掘調査は、2007（平成19）年に島根県埋蔵文化財調査センターにより行われた調査のみで（伊藤編2009）、他の遺跡と比べて発掘調査は低調である。そのため、大塚遺跡に関しては、遺跡の性格や存続時期など不明瞭な点が多く、今回の調査はそれらの解明に対して期待された。なお、大塚遺跡の南半には大塚古墳と呼ばれる、直径約13.5m、高さ約1.5mほどの墳丘状の高まりがある（出雲市教育委員会編 1956）。この大塚古墳は、江戸時代に編纂された『雲陽誌』（1717年）でも、「善哉寺内南の

方に七面四方の塚あり。是をもって村の号を大塚と号す。来歴詳ならず」と言及されているが、発掘調査は行われていないため、詳細は不明である。

参考文献

- 足立克己編 1999『姫原西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 石原聰編 2021『神門横穴墓群 第10支群』十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 出雲市教育委員会編 1956「大塚古墳」『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告第一集 82~83頁
- 出雲市教育委員会編 1988『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』
- 伊藤智編 2009『大塚遺跡』一般国道矢尾今市線地方道路交付金事業(大塚工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会
- 大庭俊次編 1999『渡橋沖遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 岸道三編 2005『小山遺跡第3地点発掘調査報告書(第5次発掘調査)』出雲市教育委員会
- 坂本豊治編 2010『矢野遺跡』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲土木整備事務所・出雲市教育委員会
- 坂本豊治編 2018『上塙治築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第6集 出雲弥生の森博物館
- 須賀照降編 2018『白枝荒神遺跡』商業用店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 仁木聰編 2005『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書29 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 幡中光輔編 2019『京田遺跡4区』一般国道9号(出雲瀬戸道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 原田敏照編 2009『山持遺跡Vol.5(6区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 島根県教育委員会
- 間野大糸編 1999『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 守岡正司編 1998『上沢II遺跡・孤廻谷古墳・大井谷城跡・上塙治横穴墓群(第7・12・22・23・33・35・36・37支群)』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 山本清 1948「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』第2号
- 山本清 1957『島根県出雲市矢野町貝塚調査概報』
- 山本清 1964『妙蓮寺山古墳調査報告』島根県教育委員会
- 渡邊貞幸・坂本豊治編 2015『西谷3号墓発掘調査報告書 本文編』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・出雲弥生の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館

第2章 調査に至る経緯と経過

本報告書は2020（令和2）年度に行われた、集合住宅新築工事とともに大塚遺跡の発掘調査の報告書である。2019（令和元）年8月27日に埋蔵文化財の照会を受けた。集合住宅の設計が決まり次第、対象地を範囲確認調査することとなり、2020（令和2）年2月12日に実施した。範囲確認調査の結果、4ヶ所で設定したトレンチのうち、3ヶ所で遺構・遺物を確認した。その結果をもとに事業者と協議し、建物が建設される約250mについて、本発掘調査を次年度実施することとなった（第3図）。なお、大塚遺跡での発掘調査は、2007（平成19）年に島根県埋蔵文化財調査センターが行った調査以来、2度目である。今回の調査地点は過去の調査地から200mほど西側にあり、遺跡の北西端部に位置する。

2020（令和2）年6月24日に重機を用いて表土層等を除去し、7月1日より人力による発掘を開始した。遺構面を精査し、確認した遺構は掘り下げて写真、図面による必要な記録を行い、8月7日に調査を終了した。

<事務手続き>※全て2020（令和2）年

- 3月24日 事業者より島根県教育委員会へ、文化財保護法第93条第1項により埋蔵文化財発掘の届出を提出。
- 4月1日 島根県教育委員会より事業者へ、建物部分250mについては発掘調査を行うよう指示。
- 6月23日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、文化財保護法第99条第1項により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出。
- 8月11日 出雲市教育委員会から出雲警察署長へ、埋蔵物発見届を提出。
- 8月11日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、遺物保管証を提出。
- 8月11日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、遺跡の取扱いについて意見書を提出。
- 8月14日 島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ、遺跡の取扱いに関する意見書の回答。
- 8月21日 島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ、埋蔵物の文化財認定及び帰属の通知。



第3図 調査地位置図

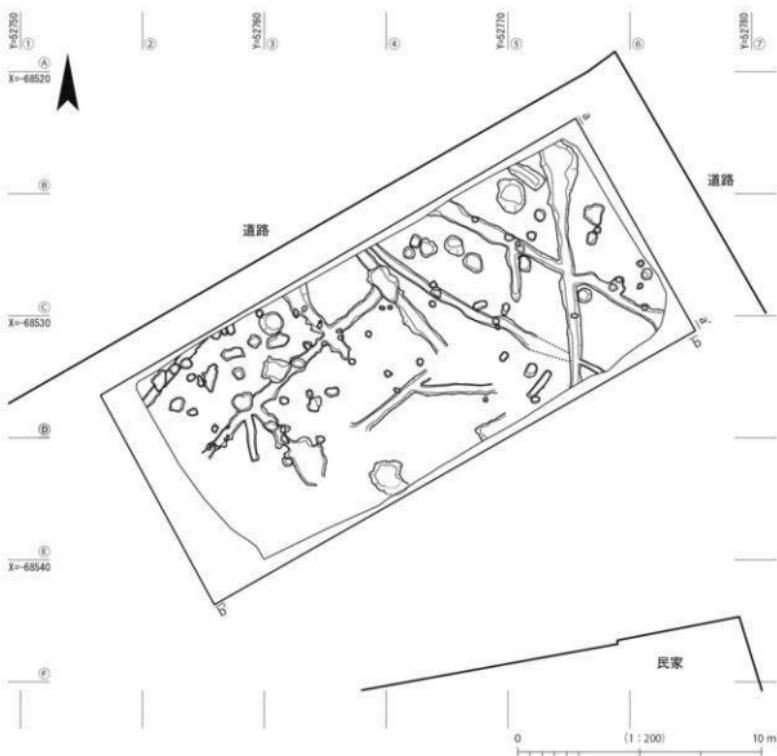
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

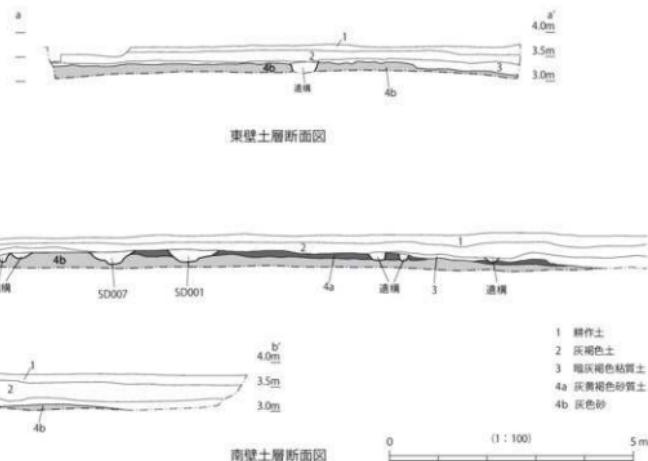
1 調査方法の概要（第4図）

工事予定範囲のうち、遺跡への影響が大きいと判断された、建物建設部分約250m²を対象に発掘調査を実施した。調査は重機を用いて1～3層の大部分を除去したあと、人力で遺構面まで掘り下げた。遺構面を精査し、確認された遺構は掘下げて状況を確認し、必要な写真、図面などの記録をとった。なお、調査区内の全域から湧水があったため、排水用の側溝を調査区の四辺に予め掘削した。

また、調査区には世界測地系第III系座標に基づいて、 $35 \times 30\text{ m}$ 四方のグリッドを設定した。グリッド



第4図 調査区配置図



第5図 調査区東壁・南壁土層断面図

ドは $X = -68520$ 、 $Y = 52750$ の交点を基点として、5 m 間隔のグリッドを設けた。南に向けてアルファベット大文字 (Ⓐ、Ⓑ、Ⓒ、Ⓓ) を、東に向けてアラビア数字 (①、②、③、④) を付与した。グリッドの名称については、北西隅の交点の番号を基準とした。遺構の位置については、グリッドを基準として記録した。遺物は基本的に遺構ごとに取り上げ、遺構外から出土したものについては、グリッドごとに取り上げた。

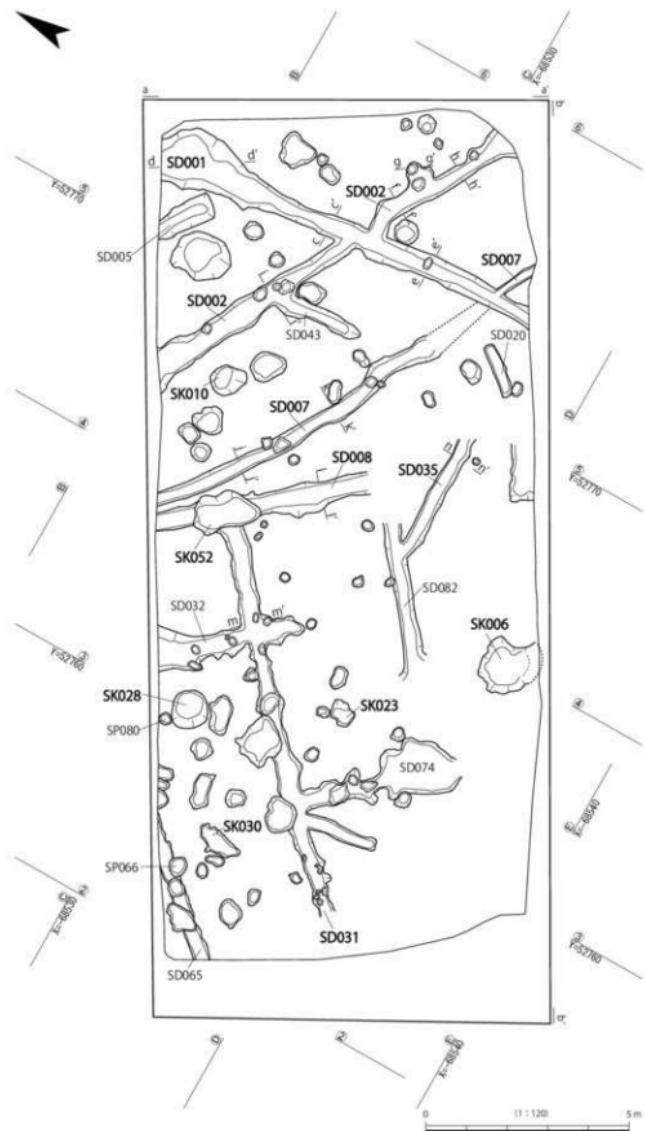
2 基本層序（第5図）

基本的な層序は上から 1 層：耕作土、2 層：灰褐色土（堆積土）、3 層：暗灰褐色粘質土（遺物包含層）、4a 層：灰黃褐色砂質土（遺構基盤層上層）、4b 層：灰色砂（遺構基盤層下層）の順に堆積している。1・2 層の厚さは約 30cm で、その下層の 3 層は最大で厚さ約 20cm だが、調査区中央付近には堆積していない。遺構基盤層のうち、4a 層は部分的にしか認められず、4b 層上面の標高は調査区東側で約 3.4 m、西側で約 3.0 m となっており、南東側に向けて若干高くなっている。

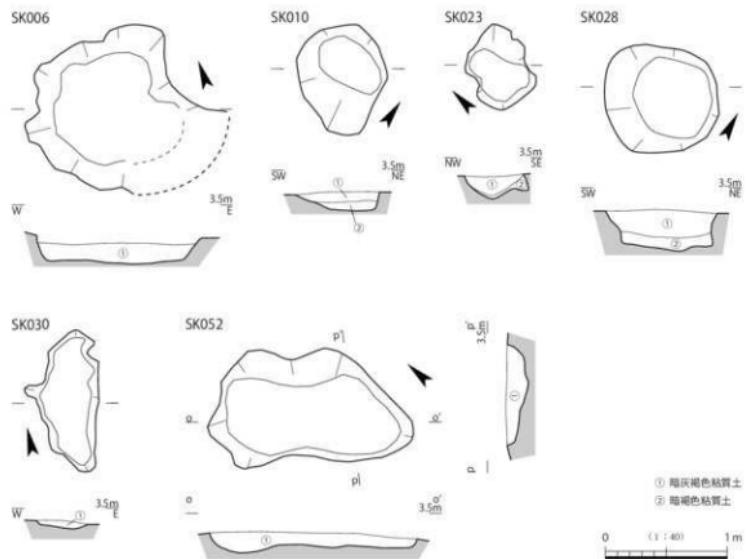
3 遺構・遺物の概要

約 250ml の調査区の範囲内で、土坑 21 基、溝 13 条、ピット 40 基を確認した（第6図）。遺構面は現地表下約 30cm で確認された。遺構の多くは深さ 5 ~ 20cm と浅くなっているが、遺構の上面は後世の削平を受けていると考えられる。

調査区全体でコンテナ 6 箱分の遺物が出土したが、遺構内出土遺物の大半は流入資料と考えられるため、遺構の詳細な時期を特定することは難しい。ただし、SK028 では古墳時代中期と考えられる完形の土師器壺や、内外面に暗文を施した赤彩の土師器高杯が出土している。出土遺物の種類は弥生



第6図 遺構配置図



第7図 遺構実測図1（土坑）

土器、土師器、須恵器、陶磁器と幅広いが、多くは古墳時代中期から後期頃の土師器や須恵器であり、本調査区で確認された遺構の中心時期もその頃と考えられる。

第2節 遺構の詳細

1 土坑

調査区内から21基の土坑を確認した。そのうち、遺存状態が比較的良好、特徴的な遺物が出土した6基について、以下に詳述する。

土坑SK006（第7図） 調査区の南辺隅のD4グリッドで確認された不整形の土坑である。長軸は北西—南東方向で、大きさは長軸約1.7m、短軸約1.3mで、深さは約30cmを測る。

埋土内から、古墳時代中期から後期頃の須恵器片や土師器片が多数出土した。遺物の多くは細片であるため、流入資料と考えられ、遺構の時期を反映しているかは不明である。また、移動式窓の口縁部片や底部片、赤彩された土師器片も出土した。

土坑SK010（第7図） 調査区東側のSD002とSD007の中間、B4グリッドで確認された、楕円形の土坑である。長軸は北西—南東方向で、大きさは長軸約90cm、短軸約70cmで、深さは約15cmを測る。

埋土内から古墳時代後期頃の須恵器片や土師器片が出土した。遺物の多くは細片であるため、流入資料と考えられ、遺構の時期を反映しているかは不明である。また、赤彩された土師器片も出土した。

土坑 SK023（第7図） 調査区西側のSD031とSD082の中間、C3グリッドで確認された、不整形の土坑である。長軸は北西—南東方向で、大きさは長軸約70cm、短軸約40cmで、深さは約20cmを測る。

埋土内から、弥生土器片や須恵器片、土師器片が出土した。出土資料の多くは流入資料と考えられ、時期幅も広いため、遺構の詳細な時期を特定することは困難である。

土坑 SK028（第7・8図） 調査区の北辺隅のC3グリッドで確認された、隅丸方形の土坑である。大きさは約90×90cmで、深さは約35cmを測る。

埋土内から、多数の弥生土器片や須恵器片、土師器片が出土したが、土坑底面から完形の土師器甕が出土したことは注目される。出土状況は、縱方向に半裁した甕（第11図11）を下に

敷き、その上に口縁を下に向かた完形の甕（第11図12）を載せている（第8図）。ただし、下側の半裁した甕は土圧によって、碎けた状態であった。よって、甕を土坑に埋納したものと考えられ、遺構に伴う遺物と判断できる。埋納された土師器甕の特徴から、遺構の時期は古墳時代中期に比定される。

土坑 SK030（第7図） 調査区西側のSD031とSD065の中間、C2グリッドで確認された、長楕円形の土坑である。長軸は南北方向で、大きさは長軸約2m、短軸約50cmで、深さは約5cmと浅い。

埋土内から、須恵器片や土師器片、陶器片が出土した。遺物の多くは流入資料と考えられ、時期幅も広いため、遺構の詳細な時期を特定することは困難である。

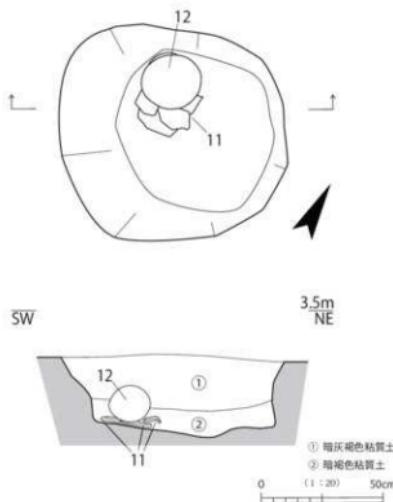
土坑 SK052（第7図） 調査区中央のSD008とSD031の交点直上、B3からB4グリッドにかけて確認された、長楕円形の土坑である。SD008やSD031より後に掘り込まれたと考えられる。長軸は北西—南東方向で、大きさは長軸約1.7m、短軸約90cm、深さは約15cmを測る。

埋土内から、古墳時代中期頃の土師器片が出土した。遺物の多くは流入資料と考えられ、遺構の時期を反映しているかは不明である。

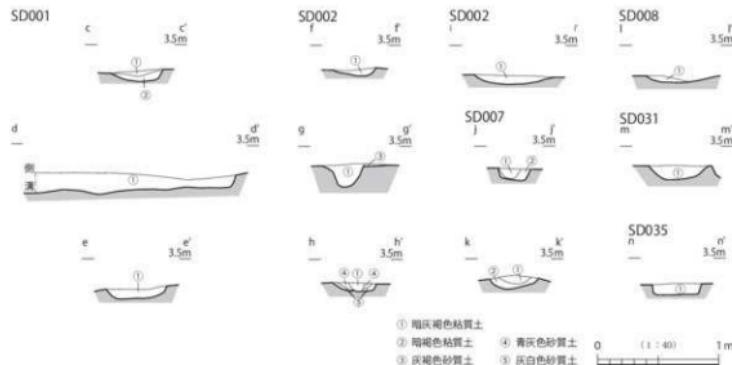
2 溝

調査区内から13条の溝を確認した。そのうち、規模が大きく、遺存状態が比較的良い6条について、以下に詳述する。

溝 SD001（第6・9図） 調査区東側で確認された、南北方向に10m以上延びる溝である。SD043と平行して掘削されており、両溝の間隔は約2mである。SD002やSD007と交差しているが、前後関



第8図 土坑SK028 遺物出土状況



第9図 遺構実測図2(溝)

係は不明である。北側で幅約1.5m、深さ約15cmほどに広がっているが、おおむね幅約50cm、深さ5~10cmを測る。

埋土内から、流入資料と考えられる須恵器片や土師器片が多数出土したが、ほとんどは細片であるため、詳細な時期の特定は困難である。

溝SD002(第6・9図) 調査区東側で確認された、東西方向に10m以上延びる溝である。SD007と平行して掘削されており、両溝の間隔は約3mである。SD001やSD043と交差しているが、前後関係は不明である。溝の幅は約40cm、深さは5~20cmを測り、溝の底面は凹凸している。

埋土内から、流入資料と考えられる須恵器片や土師器片が出土したが、細片であるため、詳細な時期の特定は困難である。また、赤彩された土師器片も出土した。

溝SD007(第6・9図) 調査区の中央から東側にかけて確認された、東西方向に11m以上延びる溝である。SD002と並行して掘削されており、両溝の間隔は約3mである。上面をかなり削平されているようで、遺構の東側で一度途切れているが、SD001と交差して東側に延びている可能性が高い。溝の幅は20cm~50cm、深さは約5cmと浅く、溝の底面は凹凸している。

埋土内から、古墳時代中期頃の土師器片が多数出土した。遺物の多くは細片であるため、流入資料と考えられ、遺構の時期を反映しているかは不明である。

溝SD008(第6・9図) 調査区の中央で確認された、北西~南東方向に5m以上延びる溝である。SD032やSD074と並行して掘削されており、溝の間隔はどちらも約3.5mである。SD031と直交しているが、前後関係は不明である。溝の幅は40~80cm、深さは約5cmと浅く、溝の底面は凹凸している。

埋土内から、流入資料と考えられる土師器片が多数出土したが、ほとんどは細片であるため、詳細な時期の特定は困難である。また、赤彩された土師器片も出土した。

溝SD031(第6・9図) 調査区の中央から西側にかけて確認された、北東~南西方向に10m以上延

びる溝である。SD082 や SD065 と並行して掘削されており、溝の間隔はどちらも約 3 m である。SD008 や SD032、SD074 と直交しているが、前後関係は不明である。溝の幅は約 50cm、深さは約 10cm と浅い。また、SD031 やそれと直交する SD032、SD074、並行する SD065 の底面は激しく凹凸している。

埋土内から、古墳時代中期から後期頃の須恵器片や土師器片が多数出土した。遺物の多くは細片であるため、流入資料と考えられ、遺構の時期を反映しているかは不明である。また、赤彩された土師器片も出土した。

溝 SD035 (第6・9図) 調査区の中央で確認された溝である。現状では、東西方向に 3.5 m ほど伸びているが、上面を削平されているようで、本来はさらに東側へ延びていたと考えられる。SD082 と交差しているが、前後関係は不明である。溝の幅は約 40cm、深さは約 10cm と浅い。

埋土内から、流入資料と考えられる土師器片が出土したが、細片であるため、詳細な時期の特定は困難である。

3 ピット

調査区内から 40 基のピットを確認したが、建物跡といった一連の有意な関係性や、柱の痕跡を確認できるものはない。ほとんどのピットは直径 20 ~ 40cm、深さ 5 ~ 15cm で、後世に上面をかなり削平されていると考えられる。SP066 と SP080 のみ深さ約 25cm とやや深い。

ほとんどのピットでは、遺物が全く出土せず、出土したとしても須恵器や土師器の細片のみであった。それらも流入資料と考えられるため、遺構の詳細な時期を特定することは困難である。

第3節 遺物の詳細

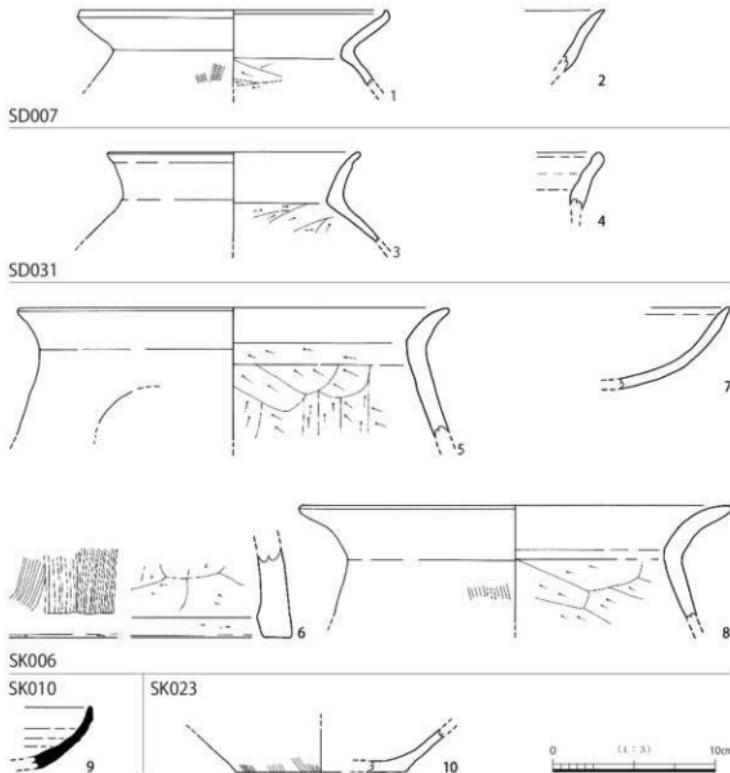
1 遺構内出土遺物

遺構内から出土した遺物の大半は流入資料だと考えられる。ただし、SK028 では、土坑内へ意図的に埋納したと考えられる遺物を確認できた。部位の特定や図化が可能だった遺物のうち、特徴的な遺物や遺存状態の良い遺物について、遺構ごとに詳述する。

溝 SD007 出土遺物 (第10図) 土師器片や製塙土器片が出土した。1 は土師器壺の口縁部である。僅かに内湾した単純口縁を呈し、口縁部の内外面にナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。古墳時代中期頃のものと考えられるが、遺構の時期を反映しているかは不明である。2 は製塙土器の口縁部で、内外面とも風化が著しく、調整は不明である。

溝 SD031 出土遺物 (第10図) 須恵器片や土師器片、製塙土器片が出土した。3 は土師器壺の口縁部である。僅かに外反した単純口縁を呈し、口縁部の内外面にナデ、胴部内面にケズリを施す。古墳時代中期以降のものと考えられるが、遺構の時期を反映しているかは不明である。4 は製塙土器の口縁部で、内外面とも風化が著しく、調整は不明である。

土坑 SK006 出土遺物 (第10図) 須恵器片や土師器片のほか、移動式竈の破片が出土した。5 は移動

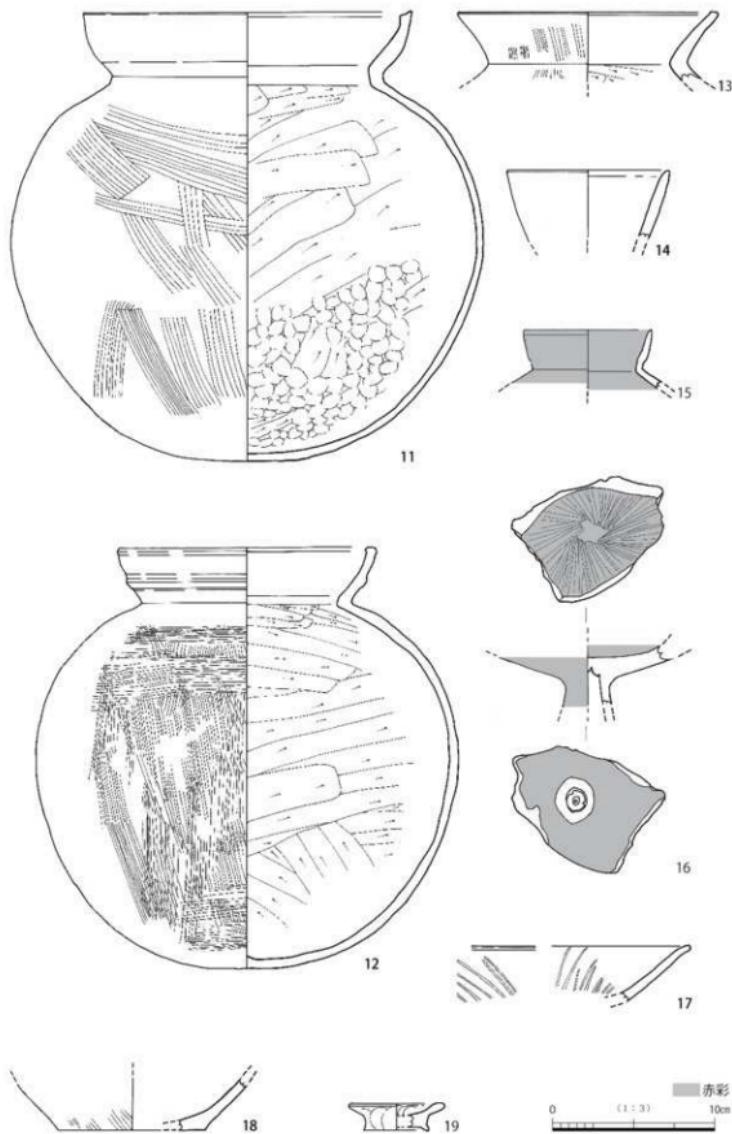


第10図 出土遺物実測図1 (SD007・SD031・SK006・SK010・SK023)

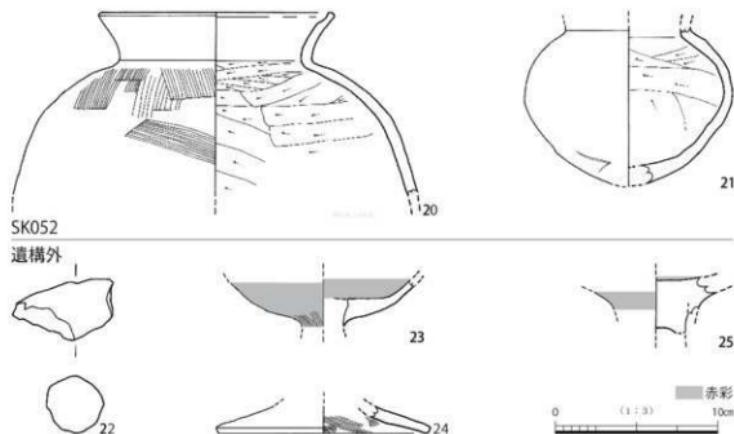
式竈の口縁部である。僅かに外反した口縁を呈し、口縁部の内外面はナデ、胴部内面はケズリを施す。外面には火除け部分の剥離痕が残っている。6は移動式竈の底部で、外面にハケメとケズリ、内面にケズリを施す。7は土師器高环の口縁部で、内湾した口縁を呈し、内外面にナデを施す。8は土師器甕の口縁部である。外反した単純口縁を呈し、口縁部の内外面にナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。土師器の時期は古墳時代中期以降と考えられるが、遺構の時期を反映しているかは不明である。

土坑SK010出土遺物（第10図） 須恵器片や土師器片が出土した。9は須恵器環身の口縁部として復元したが、环蓋の可能性もある。内外面とともにナデを施す。古墳時代後期頃のものと考えられるが、遺構の時期を反映しているかは不明である。

土坑SK023出土遺物（第10図） 須恵器片や土師器片、弥生土器片が出土した。10は弥生土器の壺



第11図 出土遺物実測図2 (SK028)



第12図 出土遺物実測図3 (SK052・遺構外)

もしくは甕の底部である。平底を呈し、外面はハケやナデ、内面はナデを施す。詳しい時期の特定は困難で、流入資料と考えられる。

土坑SK028出土遺物（第11図） 弥生土器片や須恵器片、土師器片が出土したほか、土師器甕の埋納が確認された。11は埋納された土師器甕の一つで、縦方向に半裁されて、12の下に敷かれていたものである。口縁部はかなり退化した複合口縁で、僅かに稜を確認できる程度である。口縁部の内外面にナデ、胴部外面に縦方向のハケを施す。胴部内面には全体に右上方向のケズリを行ったのち、下半のみ指によるオサエを施す。松山編年（松山1991・2000）によると、Ⅱ期新段階～Ⅲ期の特徴を示す。12は埋納された土師器甕の一つで、口縁を下に向けて、11の上に載せられていたものである。口縁部は退化した複合口縁だが、11よりはっきりとした稜を確認でき、口縁部の内外面にナデを施す。胴部外面に縦方向のハケを施したのち、肩部のみ横方向のハケを行う。胴部内面のうち、上半に横方向のケズリ、下半に縦方向のケズリを施す。松山編年によると、Ⅱ期古段階の特徴を示しており、併伴した11より古相となっているが、出土状況的に同時期のものであることは間違いない。なお、甕の内部に溜まっていた土は持ち帰り精査したが、遺物は含まれておらず、土も土坑内に堆積していた粘質土と同質のものであった。13は土師器甕の口縁部である。僅かに内湾した単純口縁を呈し、口縁部内面にナデ、口縁部・胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。14は土師器の口縁部で、内外面とも風化が著しく、調整は不明である。15は土師器甕の口縁部で、内外面にナデを施し、赤彩している。16は土師器高環の坏部から脚部である。坏部内面にナデを行ったのち、ミガキによる放射状の暗文を施し、内外面を赤彩している。坏部と脚部の接続は平らな粘土円盤を充填し、脚部側に数mmほどの刺突痕を残しており、松山編年の分類のうち、接続法αに該当する。この接続手法は、古墳時代前期以前の土師器高環によく使われるとされる（松山1991）。17は土師器高環の口縁部である。

外反した口縁を呈し、内外面にナデを行ったのち、ミガキによる放射状の暗文を施す。18は弥生土器の壺もしくは甕の底部で、平底を呈し、外面にハケやナデ、内面にナデを施す。19は手づくね土器で、猪口のような形状をしているが、用途は不明である。埋納された土師器甕 11・12 の特徴から、SK028 の時期は古墳時代中期に比定できる。

土坑 SK052 出土遺物（第12図） 土師器片が出土した。20は土師器甕の口縁部から胴部である。僅かに内湾した単純口縁を呈し、口縁部内外面にナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。21は土師器の小型丸底壺の胴部である。外面にナデ、内面にケズリやナデを施す。土師器の時期は古墳時代中期頃と考えられるが、遺構の時期を反映しているかは不明である。

2 遺構外出土遺物（第12図）

遺構外から出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。また、排水用の側溝を掘削中に出土した遺物もある。ほとんどの出土遺物は細片であったが、特徴的な遺物や遺存状態の良い遺物について、以下に詳述する。

22はC5グリッドから出土した、土製支脚の突起部分の破片で、風化が著しいため、調整は不明である。23は側溝掘削中に出土した、土師器高環の環部である。外面にハケやナデ、内面にナデを施し、内外面を赤彩している。環部底面に充填した粘土が剥離している。24は側溝掘削中に出土した、土師器高環の底部で、外面にナデ、内面にハケを施す。25はC5グリッドから出土した、土師器高環の環部から脚部である。環部内面にナデ、脚部内面に粗いナデやオサエ、外面にナデを施し、外面や環部内面を赤彩している。環部と脚部の接続は、肥厚させた粘土円盤を充填しており、松山編年の分類のうち、接続法βに該当する。この接続手法は、古墳時代中期以降の土師器高環によく使われるされる（松山 1991）。

参考文献

- 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会 1～29頁
 松山智弘 2000 「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99～130頁

第1表 出土遺物観察表

拂団 番号	出土地点	種別 器種	部位 残存率	計測値(cm)	焼成	調整		色調	備考
						外 面	内 面		
1	SD007	土師器 甕	口縁部 約1/6残存	口 径 高 さ	19.0 4.5	良好	外面 内面 ハケ、ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	にぶい黄緑(10YR, 6/3) にぶい黄緑(10YR, 6/4)～ 黒褐色(10YR, 3/2)
2	SD007	土師器 製塗土器	口縁部	高 さ	3.9	普通	外 面 内 面	外 面 内 面	灰白(10YR, 8/2) 浅黃緑(10YR, 8/4)
3	SD031	土師器 甕	口縁部 約1/6残存	口 径 高 さ	15.4 5.5	良好	外 面 内 面 ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	穢(7, 5YR, 7/6) 浅黃緑(7, 5YR, 8/4)
4	SD031	土師器 製塗土器	口縁部	高 さ	3.7	普通	外 面 内 面 風化著しい	外 面 内 面	浅黃緑(10YR, 8/3) 灰白(10YR, 8/2)
5	SK006	土師器 移動式窓	口縁部 約1/6残存	口 径 高 さ	26.8 7.8	良好	外 面 内 面 ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	灰白(2, 5Y, 8/1) 黒(2, 5Y, 2/1)
6	SK006	土師器 移動式窓	底部	高 さ	5.6	良好	外 面 内 面 ハケ、ケズリ	外 面 内 面	灰白(10YR, 8/1) 浅黃緑(10YR, 5/2)
7	SK006	土師器 高环	口縁部	高 さ	5.0	良好	外 面 内 面 ナデ ナデ	外 面 内 面	明赤褐色(2, 5YR, 5/6) にぶい黄緑(10YR, 6/3)
8	SK006	土師器 甕	口縁部 約1/6残存	口 径 高 さ	26.6 7.1	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	灰白(10YR, 8/2) 灰白(10YR, 8/2)
9	SK010	須恵器 环身	口縁部	高 さ	4.0	良好	外 面 内 面 ナデ	外 面 内 面	黄灰(2, 5Y, 5/1) 黄灰(2, 5Y, 6/2)
10	SK023	弥生土器 壺・甕	口縁部 約1/6残存	底 径 高 さ	10.3	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ	外 面 内 面	にぶい赤褐色(2, 5YR, 5/4) にぶい黄緑(2, 5YR, 6/4)
11	SK028	土師器 甕	完形復元 約1/2残存	口 径 最大径 高 さ	29.4 29.4 27.8	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ナデ オサエ、ナデ	外 面 内 面	灰黄緑(10YR, 8/2)～ 黒(10YR, 2/1) 灰白(10YR, 8/1)
12	SK028	土師器 甕	完形	口 径 最大径 高 さ	16.0 26.4 26.2	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	灰白(5Y, 8/2)～ にぶい黄緑(10YR, 5/3) 浅黃(2, 5Y, 7/3)
13	SK028	土師器 甕	口縁部 約1/6残存	口 径 高 さ	16.0 4.2	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	黒褐(10YR, 2/2) にぶい黄緑(10YR, 7/3)
14	SK028	土師器	口縁部 約1/5残存	口 径 高 さ	10.0 4.4	良好	外 面 内 面 風化著しい	外 面 内 面	にぶい黄緑(10YR, 7/2) 浅黃(2, 5Y, 7/2)
15	SK028	土師器 甕	口縁部 約1/5残存	口 径 高 さ	8.0 3.3	良好	外 面 内 面 ナデ ナデ オサエ	外 面 内 面	泰褐色(2, 5YR, 4/6) 泰褐色(2, 5YR, 4/6)
16	SK028	土師器 高环	口縁部	高 さ	3.8	良好	外 面 内 面 ナデ タマス、暗文	外 面 内 面	明赤褐色(5YR, 5/6) 明赤褐色(5YR, 5/6)
17	SK028	土師器 高环	口縁部	高 さ	3.5	良好	外 面 内 面 ナデ タマス	外 面 内 面	にぶい橙(7, 5YR, 7/4) 褐灰(7, 5YR, 7/4)
18	SK028	弥生土器 壺・甕	底部 約1/5残存	底 径 高 さ	9.2 2.9	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ナデ	外 面 内 面	にぶい橙(5YR, 6/4) にぶい橙(5YR, 6/4)
19	SK028	手づくね土器	完形復元 約1/5残存	口 径 底 径 高 さ	5.7 4.1 1.7	良好	外 面 内 面 オサエ オサエ、ナデ	外 面 内 面	にぶい橙(7, 5YR, 7/4) 灰白(10YR, 8/1)
20	SK052	土師器 甕	口縁～胴部 約1/6残存	口 径 高 さ	14.3 11.3	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	黒褐(10YR, 3/2) 灰白(2, 5Y, 7/1)
21	SK052	土師器 小型丸底甕	胴～底部 約1/3残存	最大径 高 さ	12.8 9.8	良好	外 面 内 面 ナデ ケズリ、ナデ	外 面 内 面	にぶい黄緑(10YR, 7/2) 灰黄緑(10YR, 6/2)
22	C5 グリッド	土師器 土製支脚	高 さ	3.8	良好	外 面 内 面 風化著しい	外 面 内 面	にぶい橙(2, 5YR, 6/4)～ 黄灰(2, 5Y, 6/1)	
23	側溝掘削	土師器 高环	耳部 約1/3残存	高 さ	3.0	良好	外 面 内 面 ハケ、ナデ	外 面 内 面	にぶい赤褐色(5YR, 5/3) 橙(5YR, 6/6)
24	側溝掘削	土師器 高环	底部 約1/6残存	底 径 高 さ	13.0 1.7	良好	外 面 内 面 ナデ ナデ、オサエ	外 面 内 面	灰白(10YR, 8/1)～ 褐灰(10YR, 5/1) 黒(10YR, 2/1)
25	C5 グリッド	土師器 高环	耳～脚部	高 さ	3.4	良好	外 面 内 面 ナデ ナデ、オサエ	外 面 内 面	にぶい橙(5YR, 6/3) にぶい黄緑(10YR, 7/2)～ 泰褐色(2, 5YR, 4/6)

第4章 総括

第1節 SK028の埋納土師器について

今回の調査で出土した遺物のほとんどは流入資料と考えられるが、SK028では土坑内へ人為的に置かれた、土師器壺2点を確認した。それらの出土状況や型式学的な特徴、時期は第3章で詳述したとおりだが、簡潔にまとめると以下のとおりである。出土状況については、土坑の底面直上で縦方向に半裁した土師器壺（第11図11）を下に敷き、その上に口縁を下に向けた完形の土師器壺（第11図12）を載せていた。土師器壺の特徴から、松山編年（松山1991・2000）のⅡ～Ⅲ期に比定され、古墳時代中期のものである。完形の壺の内部に遺物ではなく、口縁部を下に向ける出土状況からしても、壺の内部に何かものを入れていたとは考えにくい。しかし、丁寧に組み合わされた土師器の出土状況から、それらは意図的に土坑へ埋納された可能性が高い。すなわち、土師器の埋納行為に明確な目的や意図があったことが読み取れる。

こうした古墳時代における土師器の埋納行為は、他遺跡の事例をみると、何らかの祭祀に関わると考えられるものが多い。例えば、京都市森垣外遺跡では、掘立柱建物跡の柱穴底面に、須恵器壺1点とともに、土師器高环1点が埋納されていた。須恵器壺の特徴から、古墳時代中期後半に位置づけられ、地鎮を目的とした祭祀行為と考えられている（小池編1999）。

松江市広垣遺跡では、河道の側にある土坑に、土師器の小型丸底壺5点と高环1点が埋納されていた（江川編2017）。出土土師器の器種組成から古墳時代中期後半に位置づけられ、水辺における祭祀行為と捉えられている。同じく、水辺における祭祀と考えられる事例として、大田市大家八反田遺跡がある（松尾2015）。この遺跡では、河道に敷設された取水堰や導水溝付近から、多量の土師器の壺や高环、小型丸底壺のほか、手づくね土器や土製模造品が完形のまま出土した。出土遺物の特徴から古墳時代中期中葉に位置づけられ、灌漑に関わる祭祀行為と推測されている。

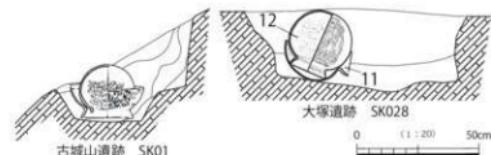
他にも、水利に関係する祭祀とされるものに、井戸の内部に土師器の壺や壺を埋納する事例がある。古墳時代の出雲平野における例を挙げると、姫原西遺跡や蔵小路西遺跡、下古志遺跡で確認されている。姫原西遺跡では、底面に土師器の壺や壺を完形のまま複数置いた井戸が3基確認された（足立編1999）。蔵小路西遺跡では、縦方向に半裁した土師器壺を井戸の内部に置いていた（間野編1999）。下古志遺跡では、2基の井戸の上面付近から、完形や完形に近い土師器の壺や器台、高环がまとめて出土した（米田・三原編2001）。いずれの井戸も古墳時代初頭頃に位置づけられ、土器は井戸を廃絶する際の祭祀に使用されたと考えられている。

また、松江市古城山遺跡の事例は、大塚遺跡との出土状況の類似性という点で、特に注目される。古城山遺跡では、丘陵の西斜面において単独で確認された土坑（SK01）から、2点の土師器壺を組み合わせた埋納行為が確認されている（石井編2008）。土師器壺の特徴から古墳時代中期後半から後期のものと考えられる。出土状況については、横方向に半裁した壺の上半部を下に置き、その上に口縁

を下に向けた完形の甕を載せていく。埋納行為の目的については推測されていないが、下に敷く甕の半裁方向以外は、大塚遺跡の埋納状況と酷似しており、関連性が注目される（第13図）。

以上のような他遺跡の事例か

ら、土師器の埋納行為には出土状況に応じて、建物の地鎮や水辺における灌漑関連の祭祀、井戸の廃絶に関する祭祀といった、様々な目的が想定されることがわかる。大塚遺跡の場合、SK028の周囲には建物跡や河道、井戸といった性格のわかる遺構がなく、埋納行為の目的を推察することは難しい。なお、古城山遺跡のSK01で確認された、土師器の埋納行為とは出土状況が酷似している。大塚遺跡のSK028と同時期の遺構である可能性もあり、両遺跡における土師器の埋納行為の目的を考えるうえで、関連性が注目される。



第13図 古城山遺跡と大塚遺跡における埋納土師器の模式図

第2節 まとめ

大塚遺跡は2007（平成19）年に島根県埋蔵文化財調査センターにより調査されている（伊藤編2009）。今回の調査は過去の調査地から西に200mほどの地点で、遺跡の北西端部にある。確認された遺構の大半は4a・4b層から掘りこまれているが、その多くは深さ5～20cmほどと浅く、遺構の上面は後世の削平を受けていると考えられる。溝に関しては、調査区の東側と西側で溝の延びる方向が異なることを確認した。どちらも同じ遺構面のもので、出土遺物の内容も大きく変わらないため、調査区の東側と西側で溝の延びる方向が異なる理由を推察することは現状では難しい。今後の周辺調査の進展によって、遺構の広がりを確認したうえで判断すべきであろう。土坑やピットに関しては、土坑21基、ピット40基と数多く確認されたが、建物跡といった一連の有意な関係性は確認できなかった。ただし、SK028では古墳時代中期の土師器甕の埋納が確認され、今回の調査における大きな成果となった。この土師器甕の埋納には、祭祀等の何らかの目的や意図があったと考えられ、その解明は今後の検討課題である。

出土遺物に関しては、調査区全体でコンテナ6箱分の遺物が出土したが、SK028に埋納されていた土師器甕を除いて、大半が流入資料であり、遺構に伴うものは少ないとみられる。確認された遺物は弥生土器から土師器、須恵器、陶磁器まで幅広いが、時期を判別できる遺物の多くは古墳時代中期から後期頃の土師器や須恵器である。よって、本調査区で確認された遺構の中心時期もその頃であると推定される。また、出土遺物の中には移動式竈や土製支脚の破片も含まれており、周辺に煮炊きを行なうような生活空間が存在した可能性もある。

以上のように、今回の調査は大塚遺跡の北西端部であったにもかかわらず、多くの遺構と遺物が確認され、古墳時代以来の当地における人々の活発な活動を伺うことができた。特に遺物に関しては、古墳時代中期から後期頃にかけての土師器や須恵器が多く出土し、この時期を中心に、大塚遺跡の集

落が発展していた可能性もある。ただし、目的や性格のわかる遺構はなく、遺物の大半も流入資料であった。周辺地形は南東に向けて高くなっている、遺跡の中心部は調査地より南東方向に存在するとと思われる。遺跡中心部における今後の調査によって、大塚遺跡の性格や存続時期などがより詳しく解明されることを期待したい。

参考文献

- 足立克己編 1999『姫原西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 石井悠編 2008『古城山遺跡』主要地方道大東東出雲線出雲郷工区地方道路交付金（改良）工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 島根県松江国土整備事務所・東出雲町教育委員会
- 伊藤智編 2009『大塚遺跡』一般国道矢尾今市線地方道路交付金事業（大塚工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会
- 江川幸子編 2017『広垣遺跡』市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書2 島根県松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団
- 小池寛編 1999「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第86冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1～54頁
- 松尾充晶 2015「古墳時代の水利と祭祀」『古代文化研究』第23号 島根県古代文化センター 69～94頁。
- 松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会 1～29頁
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99～130頁
- 間野大系編 1999『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 米田美江子・三原一将編 2001『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

写真図版



1 発掘前の状況（南東から・奥に出雲ドームと北山）



2 遺構面精査の状況（北西から）



1 完掘状況（南東から）



2 溝 SD031 検出状況（北東から）



3 溝 SD031 完掘状況（南西から）



1 土坑 SK028 遺物出土状況（南東から）



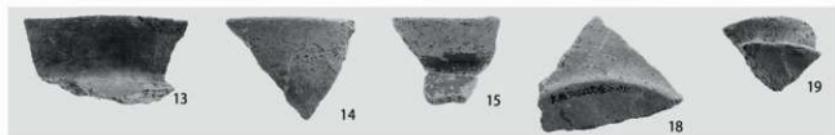
2 土坑 SK028 完掘状況（南東から）



11



12



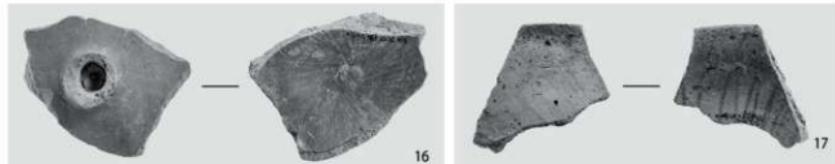
13

14

15

18

19



16

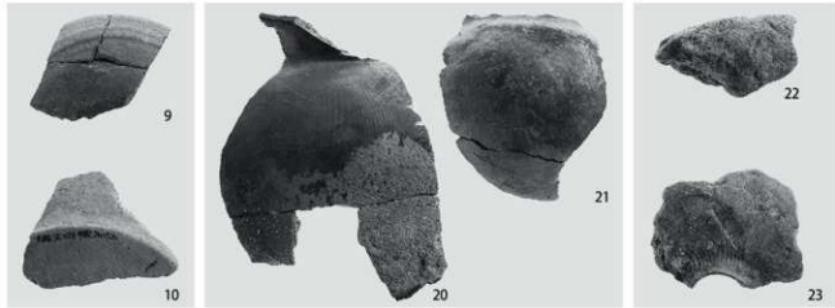
17

1 出土遺物 (SK028)



2

2 出土遺物 (SK006)



9

10

21

22

23

3 出土遺物
(SK010、SK023)

4 出土遺物 (SK052)

5 出土遺物 (遺構外)

報告書抄録

出雲市の文化財報告書 51

令和3年度出雲市文化財調査報告書

大塚遺跡

令和4年（2022）3月

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町2760
TEL(0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町70
TEL(0853) 21-6874

印 刷・製 本 有限会社 西村印刷

